



すきすきわん-産^{さん}

体験版

たたん、たたん。

窓の外を流れる景色、揺れる特急電車のドアの上に、車内の照明の照り返しが映る。

ひとつ前の快速停車駅で大勢の乗客が降りて、がらがらの車内。大きなお出かけ用のバッグを足下に、制服姿の少女の姿は優先席の上にあつた。

薄く色を抜いた髪を肩上に揃え、少し大人びた横顔は、窓の外を通り過ぎる夜景をじつと見つめている。

人影もまばらな車内とはいえ、他にも多くの空席が目立つ。

そんな中、わざわざ優先席を選んで座っている少女に、乗客の数名は少しだけ訝しげな視線を向けていた。

流石にわざわざ少女のマナーを咎めようとする者はいなかったが、それでも時折、自分の方を伺うように向けられる視線に、少女は小さく溜息を吐き、制服のおなかにそっと手を添える。

そこに感じる、確かな生命の鼓動を感じながら。

クリスマス過ぎるやいなや、町並みはあつと言う間に色合いを変えてしまった。サンタクロースの帰っていった冬の空は、ぼんやりとした曇り空。屋根に積もった雪もあつという間に消え去って、大人たちは忙しく一年の終わりを迎える準備を進めている。

カーテンの隙間からうつすらと差し込む冬の日差しの下、固く鍵を閉ざした自室のベッドに横たわったユイは、張り詰めた下腹部を擦りながら、低い唸り声のような呻きを繰り返していた。

「んっ……んーっ……っ」

ずき、ずきと脈打つように疼く痛みを、ぎゅつと目を閉じてやり過ごし。汗ばむ肩を上下させながら、吐息と喘ぎに桜色の唇を震わせる。ぐりぐりと額を擦りつけた枕は汗に湿り、シーツはくしゃくしゃに皺を寄せている。

じんじんと脚の付け根が疼き、下着の布地はぐっしりと粘液に湿っている。

臨月を超えて大きく膨らんだおなかを抱えた小さなママは、いよいよ出産に臨もうとしていた。

陣痛が始まったのは、昨日の夜遅くのことだ。

数日前から、お風呂に入るたびにユイは自分の体の変調に気付いていた。

暖かい湯船の中、一糸まとわぬ姿になって、すすく育つおなかの中の赤ちゃんに語り掛ける日課の中で、それまでおへソを持ち上げるように丸く膨らんだおなか、ゆつくり脚の付け根に向かって下降し始めているのも、ちゃんと把握していた。

同時に、脚の付け根で断続的に疼く鈍い痺れがあるのにも、下着を汚さないように内緒で買った生理用品に染み込む粘液が、日ごとその量と色を増しているのにも。

そうしてついに昨日。お風呂の中で感じた鈍い痛みは、身体を拭いている間も、着替えて部屋に戻ってから、繰り返しユイに襲い掛かった。

じん、じんと波をもつて間断的に押し寄せる下腹部の痛みは、ベッドに横になってからも続いたのだ。

「つふ……ツ、ふうー……ツ」

おなかの中が締め付けられるような感覚はそれまでユイが感じたことのない種類のもので、その苦しさに思わずシートを噛み締めて声をあげそうになるほど。荒い息を繰り返しながら、ユイは戸惑いの中、ただその痛みに耐えるしかなかった。

夜がすつかり更けてからも、おなかの痛みは治まらなかつた。時間が経つにつれ、痛む場所はおなかの奥から腰の裏、背骨にまで広まり、少女の身体を苛んでいる。

眠さに負けてうとうとしかけたところで、押し寄せる痛みに目を覚まされることを繰り返

返し、とうとう明け方まで。結局ユイは一晩中、ちゃんと眠ることもできなかったほどだ。これまでにもおなかが鈍い痛みを訴えることはあつたけれど（特に、クロスに際限なくいっぱい、身体の奥深くまで愛してもらつた後などには）、こんなにも強く、長く続いたのはこれが初めてだ。

（っ……だいじようぶ……だいじようぶだよ……っ）

なにもかも初めての経験に戸惑いながら、小さなママはそれでも気をしっかりと保ち、張り詰めたおなかを優しくさすり続けた。

「だいじようぶ……怖くないよ。ね？ ……ママも、はじめてだけ……頑張つて、ちゃんと産んであげるからね……」

ベッドの上で身を丸め、きつと自分と同じように不安なのだろうおなかの赤ちゃんに語り掛ける。つい数日前までは元気に暴れて応えてくれた赤ちゃんは、怯えてしまったのか口々に反応を返してくれなかつたけれど、それでもユイは懸命に声をかけ、眠い臉をこすつて一晩を過ごしたのだった。

途切れることない下腹部の痛みは、容赦なく断続的に、徐々に間隔を狭めてやってくるようだった。同時に、これまでまんまるに膨らんでいたユイのおなかは、きつく張りつめたように強張りながら、脚の付け根へとどんどん降りてきている。

おなかの中が熱湯に浸されたように熱く疼き、脚の付け根はじんと痺れたように熱

を持ち続け、際限なく高まっていくかのよう。

それらの事が導く事實は、ひとつ。

(赤ちゃん、生まれるんだ……っ)

いよいよやって来た出産の時を前に、ユイは決意を新たにする。

生命の神秘——クロスとユイ、二人の愛が奇跡を起こした、受精と着床から、およそ三か月。

わんぱくなパパと健気なママの愛を一身に受けてすくすくと育った赤ちゃんは、いよいよ生命のゆりかごの中でその準備を終え、小さなママのおなかの中から出てこようとしているのだ。

これまで、ふつくらと柔らかかく膨らんで、おなかのなかの赤ちゃんを優しく抱き留め、守り続けてきた少女の子宮は、陣痛に伴う予備収縮と蠕動によって徐々にその位置を変え、骨盤の上の定位置から脚の付け根に向かって下降を始めている。

合わせて分泌される母体ホルモンは狭く寄せ合わされていた骨盤の形状も変異させ、少女の胎内に赤ちゃんの通り道——産道を押し広げるための準備を進めている。

繰り返す陣痛によって、やわらかな赤ちゃんのベッドはぎゅつと固く緊張し、下腹部を押し上げるおなかの膨らみは位置も脚の付け根のほうへと降りてきている。ユイの「おんなのこ」は、いまやすっかり熱く充血し、とろとろと蜜を溢れさせては、下着の股布にく

つしよりと染みを広げていた。

「んう、ん、つ、あ、ふ、……はあ……つ」

子宮の収縮が途切れ、遠のく痛みにユイは大きく息を吐いてベッドの上に突つ伏した。横になったユイの身じろぎにあわせ、ベッドがかすかな軋みを響かせる。

他に誰もいない家の中で、時計の秒針の音だけが沈黙を埋めていた。

歳の瀬にも関わらず両親は親戚との用事で朝早くから出かけており、今日は帰りも遅くなるという。

クリスマスを過ぎ、冬休みに入ったばかりの娘がずっと体調を崩していることに、ユイの両親はとても心配をしていた。が——ユイは大丈夫だからと告げて、二人を家から送り出した。一人でおとなしく留守番をしていると、約束もした。

（えへへ。あたしひとりじゃないんだけどね……）

ちよつとだけ吐いた嘘に、ペロリと舌を出しながら。

昨日は昼も夜もちゃんとご飯が食べられず、朝も食欲がなかったユイを、母は病院に連れていくべきかとしきりに心配をしていたが——ユイは懸命の努力でこれを無理矢理に誤魔化したのだ。

特に、すぎすぎと熱く疼く陣痛が押し寄せる真つ最中のおなかを抱えながら、玄関ではどうにか平然を取り繕って両親を送り出したのは、ユイの一世一代の大舞台だった。

ドアが閉まった直後、その場にへたりこんで激しいおなかの痛みで喘いでいたユイを、応援してくれたのはもちろんクロスだ。もうすぐパパになる頼もしい旦那様は、汗をびっしりかいたユイのおでこを優しく舐め、ふさふさの尻尾で励ましてくれた。

「ありがと……クロス……」

どうにか落ち着いた陣痛の合間に玄関に鍵をかけ戸締まりを済ませて、重いおなかをかかえてふうふう言いながら二階に上ったユイは、自室に戻ってベッドの上に突っ伏した。心配そうに後を着いて来ようとするクロスを、だいじょうぶだからと告げて送り返す。クロスの気持ちとはとても嬉しかったけれど、ここから先はユイの役目だ。おなかの赤ちゃんを産んであげられるのは、他の誰でもなくユイだけだ。ちゃんとしたママになるために、一人でやり遂げなければならない大仕事なのだ。

「だいじょうぶ……クロス、あたし、頑張つて、ちゃんと、元気なあかちゃん、産むからね……」

そう言つて、愛しいパートナーと口づけし。

それから3時間。ユイは閉ざされた部屋の中で一人孤独に、痛み疼くおなかをかかえて必死に戦い続けていた。

まるで、永遠にも思える長い長い時間。

30分おきだった陣痛の波は、15分おきにまで縮まって、ちりちりとおなかの奥を炙

るような熱はなお強まり、少女の下腹部を執拗に責め苛んでいる。

「んう……っつ」

じく、じくと強まる痛みの中、身を起こし、横になり、仰向けになり。少しでも楽な姿勢を探して深呼吸を繰り返す。

邪魔くさいパジャマのズボンとは一緒にとつくと脱ぎ捨て、下半身は素裸だ。何度もベツドの上に擦りつけられ、上着もいくつかボタンが外れている。可愛らしくぷつくり膨らんだ小さな胸は、その先端を赤く充血させて、わずかに白いミルクを滲ませている。

「はあっ、はあ……っ、はああ……っ……」

大きく息を吐いて、ミシミシと音を立てる腰を持ち上げる。

捲れたパジャマの上着の下、ここ数日でさらにおおきく膨らんだおなか、ますます強張りながら、ぐうつとせり出すように脚の付け根にむかつて降りてきている。収縮を繰り返す神秘のゆりかごは、小さな少女の秘部を圧迫するように内側からユイの「おんなのこ」を押し広げていた。

綺麗なたてすじの一本線は鮮やかにほころび、幾重にも折り畳まれていた内側の粘膜を覗かせ、充血した柔襞をとろとろと広げていた。

「っ、ふ、ふーっ、ふううーっ……」

息み逃がしに大きく深呼吸を繰り返し、再びやって来た陣痛を堪えながら、ユイはベツ

ドの上に身を起こす。四つん這いになるようにして身体を起こせば、ずつしりと脚の付け根に重く熱い塊がのしかかるのがはつきりと感じられた。

これまで、できるだけ小さなママに負担をかけないように、たぼたぼとゆるる柔らかな粘液に包まれて、身体の真ん中におとなしく収まっていた赤ちやんが、ユイの身体の外へと出ていこうとしている。

「んう……っ」

ずきんと鋭く差し込まれる痛み。小さなママは熱い吐息をこぼし、ぎゅうつと歯を噛み締めてそれに耐える。

汗で張り付いた前髪を払いのけるユイ。その胎内では。

長時間の陣痛と産前予兆で充血した子宮の入り口が、ゆつくりと解れ、時間をかけて徐々に、徐々にその隙間を広げていた。

繰り返される痛みは、その準備のためのものだ。

「っふ……くう、あ……っ」

陣痛にぎゅつと目を閉じ、顔を歪めながらユイはそつとおなかを撫でる。

クロスを好きになるまで、一度も意識したこともなかった器官。

そこが、赤ちやんを育て命を育む場所であることを、女の子の一番大事な場所であることを。クロスは、あのたくましいおちんちんで何度も何度も、しっかり突ついて、叩いて

教えてくれた。

クロスの注いでくれた愛をいっぱいを受け止め、懸命に吐き出した赤ちゃんのタマゴが結びついて生まれた新しい生命。小さなおなかの中、未成熟な子宮を一生懸命に広げて整えたふかふかのベッドにそれを受け止めて三ヶ月。

ユイのおなかには、そうやってすくすくと育った二人の愛の奇跡が宿っているのだ。

「くろす、クロスう……っ」

辛い痛みの押し寄せる間もずっと、愛しい相手の名を呼びながら、ユイは固く張りつめたおなかを撫でる。自分の身体の奥に備わった神秘のゆりかご。生命を繋ぎ紡ぐ場所を意識しながら。

これまで、ユイの「そこ」は、愛しい旦那様のおちんちんを受け入れて、気持ちよくするための場所だった。女の子の身体の中でいちばん敏感な、キモチのいいトコロ。猛るオスの滾りを受け止め、固く大きなペニスに激しく粘膜を擦られ突き上げられ、柔褰を丹念にすり潰されて、快樂の絶頂を求める場所だった。

蕩けた粘膜にいっぱい蜜を溢れさせ、逞しいクロスのおちんちんをいやらしく締め付け、一滴残らず精液を搾り取るための場所だった。

けれど。これからユイはこの場所を使って、おなかの中ではぐくみ育てた小さな命を懸命に産み落とさなければならぬ。

じく、じく、じいんつ……

わずかな休憩の後、再び押し寄せる陣痛の波。ぐうつと、足の付け根の粘膜が押し上げられる。既に半開きのスリットが内側からこじ開けられるようにほころび、剥き出しになった粘膜をとろりと垂れ落ちさせた。

「んふーっ、ふうーっ、ふううーっ……」

荒い息を繰り返して、うめく少女と共に、ぎしりぎしりとはベッドが揺れる。重いおなかの圧迫に耐えかね、膝をつけて四つん這いの姿勢になったユイが呻くたび、大きく膨らんだおなかはやさゆさと揺れ、シーツに皺がよる。

「んうッ……!!」

ずきり、ずきん、じくん、ずきん。鋭い痛みが腰骨を震わせ、背中を真っ直ぐに貫いてゆく。めくれ上がったパジャマの上着の端を噛んで、ユイは声を必死に殺していた。何度も噛み締められた布地はよだれでべとべとになり、すっかり伸びてしまっている。

途切れることのない産みの苦しみ。押し寄せる陣痛の波と不安が、少女の胸を押し潰してしまいそうに膨らみ続ける。初めての経験、出産という事実への恐れと戸惑い。もうとつくに覚悟していたはずなのに、ユイは自分の身体に起こる変化に困惑を隠せない。

「っ、くうう……っ」

せり上がる孕み腹に圧迫されて胃が重く、肺も押し上げられて呼吸も上手くいかない。どんな姿勢をとれば身体が楽になるのかわからず、ユイは落ち着きなく動き続けていた。何度も起き上がっては仰向けになり、横になり、部屋の中をぐるぐると歩き回り、壁にもたれかかってみたり。

少しでも早くお産が終わればと、おなかの中の赤ちゃんが降りてくることを期待して、部屋の隅で屈伸運動までしてみたが、これはおなかがぎゅつと圧迫され、詰まって苦しいばかりで、なんの進展もなかった。

けつきよく、無力な少女はベッドに突っ伏して枕にしがみ付き、ただただ不安に震えるばかりだ。ママらしくなんてまるでできていない。

怖い、嫌だ。今にも叫び出してしまいたい。痛くて痛くてたまらない。何もかもを放り出して、泣き叫ぶことができたなら、どんなにいいだろう。

「つぐ……うう、うううウ……ツツ」

でも、そうしてしまつたら——一度でもそうやって、我を失つてしまえば、堰を切った感情はとめどもなく溢れ、留めることはできなくなる。そうなればちゃんとおなかの赤ちゃんと産んであげることができないのだと、ユイは本能で悟っていた。

（ごめんね……ママ、がんばるから……っ）

いちばん不安なのは、おなかの中から産まれてこようとしている赤ちゃんのだと。そうやって自分に言い聞かせて。ユイは汗まみれの額を拭い、気力を奮い立たせる。

ずくん、ずくん。間断的な陣痛の波が胎内を震わせ、小さなママの赤ちゃんのゆりかごが収縮を繰り返す。その衝動に促され、自然に脚の付け根に力を込め、力いっぱい息んできまいそうになる。まだ十分に開き切っていない産道の奥から、無理矢理赤ちゃんを押し出そうとしてしまう。

(だめ……っ、まだ、だめ……っ、だめなの……っ)

懸命にパジャマの裾を噛み、獣のような唸り声を上げながら、ユイは必死になって押し寄せる痛みを耐え、脈動する子宮の疼きを外へ逃がそうとしていた。

「っはーっ、はあーっ、はーっ……」

じく、じんっ、じいんっ。永遠にも思えた痛みの波長が緩み、下腹部の緊張がわずかに緩む。反らせた背中をぞくぞくと震わせ、ユイはぐったりと汗ばむ身体を枕に肩を押し付けるようにして倒れ込んだ。

ちようど、剥き出しのおしりを天井に向けて突き上げるような格好だ。

突き上げられた脚の付け根、少女の股間は真っ赤に充血し、粘液にぬめる粘膜を綻ばせてはぶくりぶくりと蜜を垂れこぼしていた。

ユイの下腹部は蠢く子宮の緊張を知らせるように固く張り詰め、子宮全体が骨盤の支え

の下へと降りてきている。

けれど。

(だめ……まだ、だめえ……っ)

そつと自分の足の付け根に指を伸ばし、火傷しそうに熱いその中のぬかるみの具合を探つて、ユイはぐつと歯を噛み締める。

長い陣痛によつて少しづつユイのおなかの中は赤ちゃんを産むための体勢をつくりはじめていたが、まだ準備は不十分だ。子宮の口はまだわずかに指一本と少ししか開き切つておらず、赤ちゃんが通り抜けるには足りていない。この状況で無理に息んでも、赤ちゃんが苦しいだけだ。

「んうう……っ、はあ、はあっ、はあ……っ」

最初、ユイはこんなことも知らずにいた。赤ちゃんを産むというのは、押し寄せる陣痛に合わせて、ただトイレでするように力を込め、気張るように息めば良いのだと。これから初めてママになる少女は、ただそれくらいしか出産について理解していなかったのだ。

でも、必死に声を抑え、歯を食い縛り、遮二無二なつてひたすらに息んで、けれどまったく赤ちゃんが産まれてくる様子はない。

一度はすっかり疲れ果て、一向に収まる様子のない大きなおなかの痛みと、ますます熱を増す脚の付け根を自覚して。

おびただしい汗の中、重いおなかを引きずって。図書館で借りっぱなしになっていた自宅出産の本を読み直し。ユイはようやく、赤ちゃんを産むことの大変さと——ママになるためにクリアしなければならぬいくつもの試練を理解した。

一番大事なのは、赤ちゃんは、勝手に産まれてくるものではないということだ。もちろん、赤ちゃんだつて頑張っている。小さな身体で、ママのおなかの中から一生懸命に出てこようとしてくれている。

でも、ちゃんと産んであげるためには、ママがそのことをよく理解して、しっかりと準備をして、元気に産まれてくるように頑張らなければいけない。

(ちゃんと、あたしが、産んであげなきゃ、だめなのっ……)

小さな胸に決意を秘めて。ユイは陣痛に震えるおなかをそつとさすり続ける。

クロスのお嫁さんになるために。大事な赤ちゃんのママになるための最後の試練。一世一代の大仕事だ。

「っ……………」

おんっ、わおんっ！

陣痛に耐えかねて枕に突っ伏したユイの耳に、不意に微かに届く声がある。

窓の外、階下の庭で力強く吠えるクロスの声だ。

(クロス……つ)

不意の応援に、思わずユイの目元から涙がこぼれそうになる。窓を隔て遠くからでも確かに聞こえる大きな吠え声。懸命に初産に挑むパートナーを励まさんとする応援の叫び。

(ありがと、クロス……、あたし、がんばるから……つ)

わんぱくなパパの応援を背中に、小さなママは不安や戸惑いを振り切るように顔を拭い、ぐつと唇を噛み締めた。

「んう……ッ」

これからユイは、同級生の子たちがまだ存在すら知らない器官を一生懸命に動かして、胎内に育まれた命を産み落としてやらなければならない。

この小さな、丹念にクロスの舌でほぐしてもらわなければおちんちんを根元まで受け入れるのも難しい、狭いおんなのこの孔から、ユイは赤ちゃんを産み落とさなければならぬのだ。

汚れを受け止めるために敷いた二重のバスタオルと、なみなみとお湯の注がれた洗面器。すっかり温くなってしまったお湯は、ユイの荒い息に触れるように小さく波を立てている。

ユイの下半身は、熱すぎのお風呂に浸かったかのようにジンジンと痺れ、おヘソの裏は沸騰するように熱い。汗ばむ全身は熱っぽい感覚が包み込まれ、ただでさえ陣痛に苦しむ

思考はますますぼんやりと霞むばかりだ。

昨晚から気が遠くなるほどの時間を耐え抜いて、まだまだ本番ははるか先なのである。「だいじょうぶ……あたし、頑張るから……っ」

けれどユイはくじけない。めげない。諦めない。

ひとりぼっちになったクロスに初めて想いを告げ、口づけを交わした時に、ユイは自身に誓ったのだ。

姉に放り出されてしまった、可哀想なクロスのために。自分がお嫁さんになってあげるのだと。

「あたし、ちゃんと、ママになるから……っ！ おなかの赤ちゃん、ちゃんと産んで、あげるんだからあ……っ！」

さらに2時間が過ぎ、初産の苦しみはなお少女を責め苛んでいた。

陣痛の間隔はますます狭まり、5分弱。ほとんど一息つく暇もなく立て続けにユイに襲い掛かってくる。

不随意の収縮と子宮の下降によって、おなかの膨らみは骨盤に隙間をこじ開けるように

脚の付け根へと下がり、ユイの下腹部は固く張りつめ強張って、鈍い痛みにも脈動している。少女の体内を大きく占めていた子宮が産道へ向けてせり上がり、わずか半日で内臓が大きく位置を変える事の反動で、吐き気と疼痛も収まらない。

「はぐ……うつつうつつ……」

何もかも未経験の戸惑いの中、再びベッドに仰向けの姿勢を取った押し寄せる陣痛に合わせ、シャツの裾を噛み、ユイは懸命に耐えていた。出産という一世一代の大仕事に立ち向かう少女の小さな身体を支えるのは、ママになるための強い決意のみである。

「うあ……つつ」

一際強烈な陣痛の波——恥骨の奥へ差し込むような激しい圧迫感と、押し寄せる痛みにも、ユイが喘ぎ声と共に身を捻った時だ。

不意に、おなかの浅いところでぼちんという小さな衝撃があった。同時に、ユイの脚の付け根をさかのぼるように、おしりと背中の内側へと小さな疼きが伝播する。

「え、あつ……う!？」

とたん、ユイの脚の付け根からびゆる、ぶちゅと熱い液体が溢れ出した。粘性を帯びた水流が充血した秘所から激しく噴き出し、ぱちやぱちやとベッドの上に飛び散ってゆく。

同時に、下腹部から大きな熱量が抜けていく感覚があった。

「は、ツ、つぐううう……ツ!？」

慌てて足の間を押さえたユイの手のひらが、熱くぬめる粘液を受け止める。握り締めていた指の間をこぼれる熱い液体――それは、これまでユイのおなかの中で、赤ちゃんを包み守っていた羊水。

長い陣痛と子宮の圧迫で、ついに胎児を包んでいた外側の胎膜が破れ、破水が起きたのである。

「あ……あ……う……ッ」

足の付け根から噴き出す水流を呆然と手で受け止め、ユイは熱に浮かされて小さな唇をあえがせる。

胎内を満たしていた粘液の噴出が終わる頃には、ベッドの上になぬかるむような水たまりができていた。汚れ避けのために敷いた二重のバスタオルでも吸収しきれない。

同時、ユイの下腹部が大きく疼き、くぱりと秘所が大きく押し開かれた。先ほどまでより遙かに強い収縮が子宮で湧き起こり、胎奥の痛みが増していく。

「う、あ……は、ぐうう……っ」

今までとは明らかに違う、おなかの奥から、熱い塊がせり上がり、強く押し出されていくような感覚。羊水によつて包まれていた赤ちゃんが、直接ユイの内粘膜に触れているのがわかる。熱く痺れる下腹部の奥に、確かに感じる生命の脈動。

（あか、ちゃん……、出て、くる……っ）

胎児を包み保護する羊水が失われたということは、これ以上赤ちゃんがユイの胎内にとどまっていられなくなったことを意味する。

ついに少女の出産は最終段階を迎えたのだ。

少女の未成熟な造りの骨盤が押し上げられ、下腹部の膨らみそのまま足の付け根へと大きく下降した。激しく形作られた胎動が、少女の股間の先端へとせり上がる。

長い時間をかけて開いた骨盤の奥、緩んだ子宮口が一気に押し下がり、灼熱の塊が脚の付け根へと押し出されてゆく。

「んぐうううううっ……!!」

子宮の収縮と蠕動運動を感じ取ると同時、シーツを掴み、歯を食い縛って、ユイは力いっばい息んだ。大きく息を吸い込んで止め、少女にとって未知の器官に懸命に意識を凝らし、生まれて初めての大事な事に挑む。

薄く開いた視界の先、でんぐり返しの途中のような姿勢で見つめた先、足の間から、びゆる、ぶちゅつと粘液が噴きこぼれる。

大きく広げられた脚の付け根、強張る下腹部にぐうつと押し上げられたユイのスリットは、赤く充血した花卉を左右に花開かせ、粘膜をぱくりぱくりと浅く開閉させては、その中心からとろとろと濃い粘液を垂れこぼす。

少女の胎奥の最も深い場所——大好きなクロスと何度も愛し合い、身体の奥深くまで繫

がった時にも、触れることの無かった場所。生命を育む神秘のゆりかご。

それが今、出口である産道へと向けて圧倒的な圧力を伴い降りてきたていた。浅く口を広げた子宮は、絶え間ない陣痛に伴ってぶるぶると震える。

「んう、はぐ、ううああ……ツツ」

ずる、ずりゆ、ぶちゆ。身体の中身が外へと引つ張り出されるような感覚が、少女の未成熟な下腹部を貫いてゆく。

破水に伴い産道は拡張され、胎内を満たしていた粘液の放出が終わったことで、息みはそのまま胎児の娩出を促した。

陣痛の間隔も短くなり、ユイの子宮口はすっかりほぐれて柔らかな弾力を帯びている。

収縮と弛緩を繰り返す胎内の動きを探りながら、ユイはぎゅつと口を結び、顔を赤くして懸命にいきむ。

「ツは、んんうつつ……はぐううううつつ!!」

シートを噛み締め、奥歯をぐつと閉じ合わせてユイが下腹に力を込めるたび、ぱくぱくと開いた膣口が反り返り、重なりよじり合わされた粘膜の柔襲を蠢かせる。

「んぐう……ううううう……つつ」

懸命にいきむ少女のおしりの谷間でも、下降した子宮に内部から押し上げられて、小さなすぼまりがぷくんと膨らむ。

ぎゅつと捲り上げた服の裾を掴む指が、白くなるまで力を籠めて。ユイは荒くなった息を少しでも抑えようと呼吸を繰り返した。

「ううあ、ツ、つは、ふうつ、ふうつ、つく…あつ…ああううつ!!」

じくんじくんと鼠径部から産道出口にかけて鋭い痛み。くちゅ、くちゅと泡だった粘液がこぼれ、あどけないつくりの秘孔が伸び縮みを繰り返す。

子宮の収縮に合わせ、ユイの膨らんだ腹部が、ゆつくりと股間に向けて下降してゆく。生命の揺り籠に包まれた小さな命は、母親となる少女の息遣いに合わせて長く狭い産道を、少しずつ、しかし確実に進んでいた。

荒い息を抑えれば、階下の庭から、確かに聞こえてくるクロスの吠え声。わんぱくなパパも、ユイを励ますように何度も何度も、力強く声をあげてくれている。

胸の中に温かく灯る声援を糧に、ユイはこくりとうなづいた。

「クロス、見えて…つ、つはあつ、あ、あたし、頑張つて…いっぱい、がんばつて…元気な、赤ちゃん、産むから…つ」

もはや間断なく襲い掛かる猛烈な陣痛の中、荒くなった息を辛うじて繋ぎながら、ユイは大好きなクロスに語りかける。そうすることで湧き上がる歓びと元気が、疲れきったユイの身体にまた活力を与えてくれるのだ。

「は…ぐう…ぐう…ふううう…ツ! つは、つ、はあつ、はあつ…ふううう…ツ」

これから、ユイはお母さんになる。クロスの赤ちゃんを産むのだ。

その事実を思い起こすたびに、途方もない愛しさがこみ上げてきて、ユイの小さな胸はもうはちきれてしまいそうだ。

事実、すつかりはだけたパジャマの隙間、膨らんだ乳房の先端からは、白いミルクが滲み、ぼたぼたと垂れ落ちていた。ピンクのパジャマを汚すそれは、愛しい我が子に与えるためのものだ。

小さなママの身体は、新たな生命をはぐくみ育てるための準備をすつかり整えて、おなかの中の赤ちゃんの誕生を待ちわびている。

荒い息を懸命に整えて、ユイは再度、シーツを掴む手に力を込めた。

「んぐうう……っは、おふ、っ……ぐううううううう……！」

背中を反らし、腰を持ち上げるようにして、脚の付け根の子宮に力を籠める。汗でびっしりのおでこを揺らし、顔を真っ赤にして、歯を食い縛って、ありったけの力でおなかの奥のゆりかごを意識した。

小さなママは、全身を使つて、おなかのなかの赤ちゃんを産み落とそうともがく。

破水の後、なおも破れながら胎児をぬめるように取り囲む胎膜がずるりと滑り。子宮の収縮に合わせて息む腹圧が、押し下げられていた子宮の口から、ぬるぬるの塊をゆっくと押し出してゆく。

「つは、かはつ、はあつ、はあつ……、はぐううつつ……つつ！」

深い水の中に潜つては、息継ぎを繰り返すように。押し寄せる陣痛の波の合間に、呼吸を継いで。

手も指も届かない深い胎内から、自分の力だけで、大切な命を産み落とす。

あまりにも狭い未発達な少女の粘膜をこじ開け、胎児は少しずつ、少しずつ、ぬめる胎膜に包まれた小さな体が押し出されてくる。

「んふ、つぶうつ、はーつはああつ、はーつ」

ユイは何度も息継ぎをしながら、陣痛の波に合わせて懸命にいきむ。歯を噛み締め、指が白くなるまで拳を握り締めて、収縮する子宮に押し上げられると同時に、脚の間へと押し込む力をこめる。

「んんうううううつつ……!!」

ぐうつつと押し上げられた産道の出口が、ゆつくりと裏返る。充血した秘裂の奥に覗くのは、折り畳まれたような粘膜の襞。

くぼり、と開いた襞の奥、複雑に折り重なり合ったそこを押し上げるように、ぐうつつと胎胞に包まれた薄赤い塊がせりだしてくる。

ちゆく、くちゆく——ぶちゆく。

小さな赤ちゃん、胎児を保護する二重の膜——ぬるぬると柔らかな羊膜と卵膜に包ま

れた、薄赤い塊が、ユイの股間からゆつくりをと顔を覗かせた。

粘液に濡れた小さな生命は、小さな産道を押し広げて、ゆつくりと少女の脚の付け根へと押し出されてゆく。

「あああああつ、あくうううつ、つぐ、ふぐうう……ッ!!」

愛しい相手の生殖器を受け止めて、至上の快感をもたらし、余すところなく生命の素の白濁を絞り取るための器官は、もう一つの大切な役割である生命を誕生させるためにその全力を注いでいる。

「んぐうう……ううう……うううう、つは、つ、はあつ!!」

小さく顔を覗かせた赤ちゃんを産み落とそうと、なおも、可愛らしい顔を真っ赤にして懸命に息み続けるユイだが——事はそう簡単ではなかった。

わずか数センチしか開かない、狭く、固く頑丈な子宮口を、それよりも大きな胎児を押し出すのだ。ぬるぬると滑る粘膜に包まれた小さな生命の塊を、自分だけの力で娩出する——まだいとけない少女にとつて、それは途方もなく大変なことだ。

「んつ……んううつ、つは、あくつ、かはつ」

長いいきみの連続に、肺が喘ぐように酸素を求めて震える。とうとう息が続かなくなり、堪えていた呼吸が緩んだ。

「んうああつ!？」

下腹部に込めた力が緩んだ瞬間、出口まで押し上げられていた赤ちゃんは、ずるんと支えを失って再びユイの産道の中へと潜っていつてしまふ。まだママのおなかの中にいたのだと、恥ずかしがりやの赤ちゃんが駄々をこねているかのようだ。

息みの反動でずりゆうつ、と胎内へ引き戻される赤ちゃんに膨らみ切った産道を擦られ、ユイは背中を戦かせた。

「……つくつ、はっ、はあっ、はあっ、はあーっ」

大きく肩を上下させるユイの額から、ぽたぽたと大粒の汗の雫がこぼれた。ずくんずくと疼く下腹部は、固く張り詰め、収縮と脈動を繰り返す。

「はっ、はあっ、はああっ……はーっ、んくつ、んううううっ!!」

(だいじょうぶ……だからね……。がんばってっ……ママが、ちゃんと、っ……産んであげるから……。あかちゃん、はやく、でてきて……っ!)

(続きは本編で)

【奥付】

「すきすきわんこ・産 体験版」

発行:平成 29 年 9 月 5 日

制作:良い子の諸君!

※作中の登場人物、組織、施設等は
すべて架空のものです。